



Title	要介護認定を受けていない後期高齢者の交流状況と生活満足度の関連について
Author(s)	岩石, 眞須子; 吉川, 夕佳; 田村, 尚子 他
Citation	大阪公衆衛生. 2007, 78, p. 27-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83462
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

要介護認定を受けていない後期高齢者の 交流状況と生活満足感の関連について

実施者 太子町健康福祉部保健センター 岩石真須子、吉川夕佳、田村尚子、瀬戸節子、

西明貴子、太子町健康福祉室 梶原 望、胡麻 千代

共同研究者

大阪府立看護大学大学院 博士前期課程 近藤智子

I はじめに

人口の高齢化に伴い、今後、後期高齢者数は著しく増加することが予測されている。また、後期高齢者は疾患への罹患率が高く、日常生活の自立度が低下している者が多く、今後高齢者施策を考えるうえで、地域支援は重要課題である。本町においても、全高齢者人口のうち、後期高齢者割合は年々上昇し（平成 16 年 4 月 16 日現在 43.0%）、さらに介護保険制度の認定者をみると、第 1 号被保険者のうち前期高齢者の認定率 4.8% に比べて、後期高齢者の認定率 28.7% と高くなっていることから、後期高齢者に対する介護予防対策は大きな課題である。本調査では、後期高齢者に焦点を当て、彼らの日常生活状況、社会生活状況、生活満足感の実態を明らかにし、個々の状況に応じた地域支援方法を検討した。

II 調査方法

太子町の介護保険第 1 号被保険者（平成 17 年 7 月 1 日現在）のうち、要介護認定を受けていない在宅の後期高齢者全数 724 人を対象に、日常生活状況（主観的健康感、歩行、視力、聴力に対する支障）、社会生活状況（老研式活動能力指標、外出頻度、他者との交流頻度等）、生活満足感（生活満足度尺度 K 等）に関する計 52 項目について、平成 17 年 8 月 1 日～15 日を調査期間とし、無記名自記式郵送調査を実施した。

質問紙回収 480 人（回収率 66.3%）のうち、性別、および年齢、世帯構成に記入もれのない

465 人（有効回答率 64.2%）を分析対象とした。

分析対象者を年齢階層別に 2 群間、「75 歳～84 歳」群、「85 歳以上」群で比較検討した。統計解析は、名義尺度には χ^2 独立性の検定、順序尺度は Mann-Whitney 検定、平均値には t 検定を用いた（SPSS13.0J for Windows）。有意水準は 5% 以下とした。

III 結果

1) 対象の属性

分析対象者は、男性 208 人（44.7%）、女性 257 人（55.3%）であり、平均年齢 79.7 ± 4.23 歳であった。男性の年齢階層別人数は、「75 歳～84 歳」は 184 人（88.5%）、「85 歳以上」は 24 人（11.5%）であった。女性の年齢階層別人数は、「75 歳～84 歳」は 210 人（81.7%）、「85 歳以上」は 47 人（18.3%）であった。

世帯構成では、年齢階層別にみると「75 歳～84 歳」の単独世帯は 46 人（11.7%）、その他の世帯 348 人（88.3%）、「85 歳以上」の単独世帯は 9 人（12.7%）、その他の世帯 62 人（87.3%）であり、年齢階層別の世帯構成割合には有意な相違は認められなかった。

2) 後期高齢者の実態

(1) 主観的健康感

主観的健康感は、年齢階級別でみると「75 歳～84 歳」は、「健康である」は 282 人（74.4%）、「健康でない」は、97 人（25.6%）、「85 歳以上」は、「健康である」は、35 人（53.8%）、「健康で

ない」は、30人(46.2%)であり、「75歳～84歳」の「健康である」の割合は、有意に高かった。
(2) 歩行、聴力、視力の支障

全分析対象者のなかで不自由を感じている割合が最も高かったのは、聴力であった。年齢階層間の歩行および聴力、視力に対する有意差が認められた(表1、2)。

表 1 年齢階層別による歩行に対する支障

		支障の程度		支障はありが		支障があり		人数 (%)	
		支障なし		歩いて外出可能		外出できない			
								有意	
								確率	
歩行	年齢	75～84歳	(n=374)	240 (64.2)	119 (31.8)	15 (4.0)	***		
	年齢別	85歳以上	(n=64)	18 (28.1)	42 (65.6)	4 (6.3)			

注) 検定は Mann-Whitney 検定による * : p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

表 2 年齢階層別による聴力および視力に対する支障

		支障の程度		支障はありが		不自由を感じ		有意	
		支障なし		歩いて外出可能		不自由ではない			
								確率	
聴力	年齢	75～84歳	(n=377)	233 (61.8)	109 (28.9)	35 (9.3)	***		
	年齢別	85歳以上	(n=67)	23 (34.3)	21 (31.3)	23 (34.3)			
視力	年齢	75～84歳	(n=379)	219 (57.8)	141 (37.2)	19 (5.0)	***		
	年齢別	85歳以上	(n=67)	21 (31.3)	36 (53.7)	10 (14.9)			

注) 検定は Mann-Whitney 検定による * : p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

(3) 老研式活動能力指標

老研式活動能力指標 13 項目すべてに回答していた者は、413 人 (88.8%)、平均得点は 10.6 ± 3.0 点であった。413 人のうち 141 人 (34.1%) が 13 点満点であった。

本調査の当該指標のクロンバックα係数は 0.857 であった。年齢階層別にみた平均得点は、「75～84歳」11.1 ± 2.4 点、「85歳以上」7.1 ± 4.0 点であり、「85歳以上」で平均得点有意に低かった。

(4) 外出頻度

外出頻度は「毎日 1 回以上」265 人 (57.0%)、「週 1 回以上」147 人 (31.6%)、「週 1 回未満」39 人 (8.4%)、無回答 14 人 (3.0%) であった。年齢階層別では外出頻度に有意差が認められた(表3)。

		毎日 1 回以上	週 1 回以上	週 1 回未満	有意確率
年齢階層別	75～84 歳 (n=383)	239 (62.4)	123 (32.1)	21 (5.5)	***
	85 歳以上 (n=68)	26 (38.2)	24 (35.3)	18 (26.5)	

注) 検定は Mann-Whitney 検定による
 * : p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

(5) 他者との交流

① 交流頻度(交流相手なしと無回答を除く)

年齢階層別では、別居子、友達、近所の人、電話での交流頻度に有意差が認められた(表4)。

		交流頻度		ほとんど毎日		週 1 回程度		ほとんどしない		人数 (人数%)	
別居子	年齢	75～84歳	(n=286)	88 (30.8)	91 (31.8)	66 (23.1)	41 (14.3)			**	
	年齢別	85歳以上	(n=58)	9 (15.5)	19 (32.8)	16 (27.6)	14 (24.1)				
友達	年齢	75～84歳	(n=458)	17 (3.7)	92 (20.7)	122 (34.1)	97 (27.1)			n.s.	
	年齢別	85歳以上	(n=64)	6 (9.4)	13 (20.3)	25 (39.1)	20 (31.3)				
近所	年齢	75～84歳	(n=452)	62 (17.6)	130 (36.9)	101 (28.7)	59 (16.8)			*	
	年齢別	85歳以上	(n=59)	8 (13.6)	18 (30.5)	13 (22.0)	20 (33.9)				
近所の人	年齢	75～84歳	(n=465)	125 (34.2)	139 (38.1)	42 (11.5)	59 (16.2)			*	
	年齢別	85歳以上	(n=64)	17 (26.6)	21 (32.8)	9 (14.1)	17 (26.6)				
電話	年齢	75～84歳	(n=474)	83 (22.2)	152 (40.6)	91 (24.3)	48 (12.8)			*	
	年齢別	85歳以上	(n=64)	11 (17.2)	21 (32.8)	15 (23.4)	17 (26.6)				

注) 検定は Mann-Whitney 検定による n.s.: 有意差なし * : p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

② 交流場所(交流相手なしと無回答を除く)

本調査対象者である後期高齢者の 6 割以上が、少なくとも週 1 回以上、近所の人と交流する機会をもっていたが、「85歳以上」の交流頻度は「75～84歳」に比べて有意に低かった。交流場所をみると、「75～84歳」では、友達とは外出先、近所の人とは自宅の玄関先の割合が高かったが、「85歳以上」では自宅内の割合が多くなり、年齢階層による相違がみられた。

(6) 生活満足度尺度 K

生活満足度尺度 K の 9 項目すべてに回答していた者は、380 人 (81.7%)、平均得点は 4.5 ± 2.3 点であった。本調査の当該指標のクロンバックα係数は 0.709 であった。年齢階層別にみた平均得点は、「75～84歳」4.6 ± 2.3 点、「85歳以上」3.6 ± 2.0 点であり、「85歳以上」で平均得点有意に低かった。

3) 交流頻度と生活満足度との関連

交流頻度「ほとんど毎日」と「週 1 回程度」を『多い交流』、「月 1 回程度」と「ほとんどしない」を『少ない交流』とカテゴリー統合し、この 2 群間を交流相手別に生活満足度尺度 K 得点の平均値の差の検定を行った。2 群間で生活満足度尺度 K 得点の平均値に有意差のあった交流相手は、別居子 (t=-2.73, p=0.007)、友達 (t=-2.78, p=0.006)、電話 (t=-2.32, p=0.021) であった。同じく年齢階層別では、「75～84歳」は別居子 (t=-2.21, p=0.028)、友達 (t=-2.09, p=0.037)、電話 (t=-2.10, p=0.036) であった。しかし、「85歳以上」はどの交流相手においても生活満足度尺度 K 得点の平均値に有意差は認められなかった。

IV まとめ

本調査の目的は、在宅後期高齢者を対象に交流状況の実態と、交流と生活満足感との関連について明らかにし、後期高齢者の QOL に着目した閉じこもり予防のあり方を検討することであった。

太子町の 75 歳以上後期高齢者のうち、要介護認定を受けていない 724 人を対象に質問紙による郵送調査を行い、以下のことが明らかになった。

- ・ほとんど外出しない(週 1 回未満)いわゆる「閉じこもり」状態にある後期高齢者は 8.4% であった
- ・歩行、聴力、視力の支障において、不自由を感じているのは、聴力が多かった。
- ・日常生活状況は、約 7 割が自分は「健康である」と感じており、5 割以上は歩行、聴力、視力に支障のない者であった。
- ・75 ～ 84 歳と 85 歳以上で、主観的健康感、歩行および聴力・視力に対する支障、老研式活動能力指標の得点、外出頻度、別居子および友達・近所の人との交流頻度、電話での交流頻度、生活満足度尺度 K の得点に有意な相違がみとめられた。いずれの項目においても、85 歳以上で有意に低い結果であり、85 歳以上の後期高齢者の要介護状態に対するリスクの高さと支援の必要性がうかがえた。

- ・本調査対象者である後期高齢者の 6 割以上が、少なくとも週 1 回以上、近所の人と交流する機会をもっていたが、85 歳以上の交流頻度は 75 ～ 84 歳に比べて有意に低かった。交流場所をみると、75 ～ 84 歳では、友達とは外出先、近所の人とは自宅の玄関先の割合が高かったが、85 歳以上では自宅内の割合が多くなり、年齢階層による相違がみられた。
- ・別居子や友達との交流、あるいは電話での交流が少なくとも週 1 回以上である後期高齢者の生活満足度は、それ以下の者よりも有意に高かった。

これらのことから、自宅内での交流を高めることや、聴力に配慮しながら交流をすすめることが、後期高齢者の生活満足感を高める可能性があることが示された。後期高齢者の QOL に着目した閉じこもり予防に際しては、外出頻度だけでなく、彼らの交流実態を把握することの重要性が示唆された。また、後期高齢者の中でも 85 歳以上に注目する必要があることが示された。

V 謝辞

本調査にご協力いただいた大阪公衆衛生協会や太子町住民のみなさんに深く感謝いたします。